

本
文
編

〔凡例〕

一、各歌の頭の数字は、詞章の五十音順配列によって、今回ここで新たに付した歌番号である。小著『隆達節歌謡』の基礎的研究』（平成9年・笠間書院刊）付録Ⅰ所収「隆達節歌謡」全歌集（附・諸本索引）」とは本文、歌順ともに若干の異同がある。以後、本書を定稿としたい。

二、歌謡本文は、諸本を対照の上、校訂し、適宜漢字を当て、読点を施した。仮名遣いは歴史的仮名遣いに統一した。

三、「隆達節歌謡」には施された譜によって「小歌」と、それより古い来歴の詞章が多いとされる「草歌」に分類することが可能である。うち、「草歌」には春・夏・秋・冬・恋・雑という和歌様の部立が存在する。「草歌」には歌謡の末尾に*の記号を付し、続けてその部立を明示した。

四、「隆達節歌謡」とされながら、未だ歌本から確認できない歌謡二首を伝承歌①、②として巻末に掲げる。

1 愛は誓うて添ひはせて、月よ花よと見たばかり

2 逢うて立つ名が立つ名かの、なき名立つこそ立つ名なれ（*恋）

3 朝顔の花の露ほど馴れ初めて、富士の山ほど立つ名やの

4 明日をも知らぬ露の身を、せめて言葉をうらやかに

5 あただうき世にあればこそ、人に恨みも、人の恨みも

6 味気ないものちや、忍ばずに添はいで

7 東より都の空ものどかなる、世に逢坂の関を越えけり

8 合はせけん人こそ憂けれ薰物の、独り伏籠に燻る思ひは（*恋）

9 逢はぬ恨みは積もれども、見れば言の葉もなし

10 逢はぬほどこそ頼みなれ、今朝の別れの、あもの憂や

11 相思ふ仲さへ変はる世の慣らひ、ましてや薄き人な頼みそ

12 逢ひ見ての後の別れを思へばの、辛き心も情かの

13 逢ひも見もせぬ咎もなき我に悋気召さるる、鉦打たうかの、そなたは

14 逢ふ時は秋の夜もはや明けやすや、独り寝る夜の長の夏の夜

15 逢ふは今宵別れは朝、先づ思はるる、明日の別れを

16 逢ふは稀よ独り寝は繁し、あの君故にあらぬ名の立つ

17 逢ふまでの命もがなと思ひしに、悔しや、君の辛ければ

18 逢ふ夜の月は静かに廻れ、直ぐ路もあるか、直ぐ路もあるかの、明けやすや

19 逢ふ夜は明けて逢はぬ夜の長きよの、鳥も鐘も独り寝る夜は障らぬものを

20 逢へば人知る、逢はねば肝が煎らるる、あ笑止やの

21 雨が降れがなはらと、独り板屋の寂しきに（＊雑）

22 雨の降る夜の濡れ小袖、ことが欠くれば着る、お寝る

23 雨の降る夜の独り寝は、いづれ雨とも涙とも

24 雨の夜にさへ訪はるるが、月に訪はぬは心変はりかの君は

25 雨はさながら便りとの、夜の砂潤うて沓に音なし

26 あら何ともなの、うき世やの（＊雑）

27 あるは嫌なり、なるも嫌なり、思ふはならず、さてもよしなやな、何とせうぞの

- 28 いかにせん、いかにせんとぞ言はれける、もの思ふ時の独り言には
- 29 いかにせん、葛の裏吹く秋風に、下葉の露の隠れなき身を
- 30 いかにせん、我が通ひ路の関守は、聞も許さず、なかなか
- 31 幾度も摘め、生田の若菜、君も千代を積むべし（*春）
- 32 急ぐ別れや暁の、恨み尽きせぬ鳥が音の声
- 33 磯には住むまじ、さなきだに、見る目に恋の云、まさるに
- 34 いつしか人の秋風に、恨み葛の葉の露ぞこぼるる（*秋）
- 35 いつも暁鳴く鹿は、逢はで鳴く音か、逢うて別れを鳴く音か
- 36 いつも心は通へども、人目忍ぶの身の憂さよ

37 いつも春立つ門の松、茂れ松山、千代も幾千代若緑（*春）

38 いつも見たいは、君と盃と春の初花

39 いつも見れども美しの振りや、面向不背か、花の盛りか（*春）

40 愛し娘をつる、浜に遣るまじ、つるつる潮風はつる、身の毒ぢやもの

41 いとど心の乱るるに、何ぞ薄の穂に出づる

42 いとど名の立つ秋風に、誰そよ妻戸をきりぎりす（*秋）

43 厭はるる恨みながらに寝ぬる夜は、枕の時雨幾通り

44 厭はるる身となり果てば、せめて我が身の咎も、身の咎も云、身の咎もがな

45 いとほしいさが積もり来て、さらに寝られぬ

46 命^{いのち}ほどつれなきものは世^よにあらじ、虎^{とら}伏^ふす野^の辺^べをまた来^きたよや君^{きみ}

47 言^いへば世^よに触^ふる 云^云、遣^やる瀬^せなや（＊恋）

48 言^いへば世^よに触^ふる、世^よに触^ふる、言^いはねば憂^{うれ}き人^{ひと}のそれと知^しらばや

49 嫌^{いや}々は思^{おも}ひのあまりの裏^{うら}、逢^あはせて給^{たま}ふれ、逢^あはせて給^{たま}ふれ、とにかくに

50 賤^{いや}しき身^みとて情^{なさけ}のないは、賤^{しづ}屋^やに月^{つき}は月^{つき}は宿^{やど}るまいかの

51 嫌^{いや}とおしやるも頼^{たの}みあり、青^{あを}柳^{やぎ}よりも雪^{ゆき}折^をれの松^{まつ}

52 色^{いろ}々の草^{くさ}の名^なは多^{おほ}けれど、何^{なん}ぞ忘^{わす}れ草^{ぐさ}はの（＊恋）

53 色^{いろ}見え初^そめて恨^{うら}めしの君^{きみ}や、折^{をり}々^{をり}ごとの偽^{いつは}りは嫌^{いや}

54 色^{いろ}よき花^{はな}の匂^{にお}ひのないは、美^{うつく}し君^{きみ}の情^{なさけ}ないよの

55 憂^{うれ}きは在京^{ざいきやう} 妻^{つま}持^もちながら独^{ひと}り寝^ねをする（*恋）

56 うき世^よは夢^{ゆめ}よ、消^きえては要^いらぬ、解^とかいなう、解^とけて解^とかいの

57 うつつなの鳥^{とり}が音^ねや、鳴^なかば独^{ひと}り鳴^なけ、人^{ひと}な誘^{さそ}ひそ（*恋）

58 うつつなや、思^{おも}ふまじとは思^{おも}へども、君^{きみ}の情^{なさけ}の深^{ふか}ければ

59 宇津^{うつ}の山^{やま}辺^べのうつつにも、夢^{ゆめ}にも人^{ひと}に逢^あはぬよの（*恋）

60 移^{うつ}り移^{うつ}れる人^{ひと}の心^{こころ}、さらさらさらば永^{なが}らへよ、さのみ徒^{あだ}なる君^{きみ}が名^なも惜^をし

61 移^{うつ}ろひやすき人^{ひと}の心^{こころ}よ、げにも徒^{あだ}なる花^{はな}の姿^{すがた}ぞ

62 生^うまるるも育^{そだ}ちも知^しらぬ人^{ひと}の子^こを、いとほしいは何^{なん}の因^{いん}果^{ぐわ}ぞの

63 浦^{うら}の煙^{けぶり}は藻^も塩^{しほ}焼^やくに立^たつ、我^わが名^なは君^{きみ}故^{ゆゑ}に（*恋、但し二伝本では小歌）

64 浦は薄雪、小網曳く、袖は涙にしほしほと（*冬）

65 恨みあるこそ頼みなれ、思はぬ仲は振らず、振られず

66 恨み恋しや、恨みしほどは来しものを（*恋）

67 恨み候まじなかなかに、知らず知られぬ折を思へば（*恋）

68 恨みたけれど、身のほどが揃はぬ、よる恨みは人により候

69 恨みたけれども、いや身のほどもなや、総じて恨みも 云、人により候

70 恨みつ侘びつ、寝る夜の床ぞ寂しき（*恋）

71 恨みない仲も恨みつれば恨みらるる、恨み告げじと思ふよの（*恋）

72 恨みも言はぬ、訳もまたおしやるな、我さへ心の変はらねば

73 恨むるも恨みられしもいつの間に、昔語りになるぞかし

74 羨ましやな月と星、廻り逢ふ夜の暮れても暮れても

75 縁さへあらばまたも廻り逢はうが、命に定めなほに

76 おしやけさまにはいたけれど、昼は腰打て足さすれ、夜は殿御のただお寝る

77 帯を遣りたればし馴らしの帯とて非難をおしやる、帯がし馴らしならばそなたの肌も寝馴らし

78 面影は手にも溜まらずまた消えて、添はぬ情の恨み数々

79 面影は手にも溜まらずまた消えもせて、浮き名の恨み数々

80 面白のお月や 云、二人見ばなほ

81 面白の春雨や、花の散らぬほど降れ（*春）

82 面白^{おもしろ}や春雨^{はるさめ}の、花^{はな}の散^ちらぬほど降^ふる（*春）

83 面白^{おもしろ}や松^{まつ}の雪^{ゆき}、千歳^{ちとせ}旧^ふるとも見^みも飽^あかじ（*冬）

84 思^{おも}はば思^{おも}へ恨^{うら}めしの振^ふりや、報^{むく}いの早^{はや}き世^よにありながら

85 思^{おも}はば君^{きみ}よ、潮干^{しほひ}る間^まにも、必^{かな}らず波^{なみ}の寄^よるでなしとも

86 思^{おも}ひ思^{おも}ひし木^このもとにゐての、花^{はな}は一夜^{ひとよ}も初^{はつ}がよい

87 思^{おも}ひ思^{おも}ひて逢^あふも夢^{ゆめ}、歎^{なげ}くまいよの、別^{わか}れをも

88 思^{おも}ひ切^きらうやれ、忘^{わす}れうやれ、添^そはぬ昔^{むかし}もありつるに

89 思^{おも}ひ切^きらねば恋^{こひ}の路^{みち}を、身^みをもやつさじ、人^{ひと}も恨^{うら}みじ

90 思^{おも}ひ切^きりしにまた見^みえて、肝^{きも}を煎^いらする、肝^{きも}を煎^いらする（*恋）

91 思ひ切りたる雨の夜に、夢かや、君の訪れは

92 思ひ切れとは身のままか、誰かは切らん恋の路

93 思ひ焦がれて消ゆる我に、何の因果ぞ、君はよそ心

94 思ひ初めしが身のままか、思ひ切れとは身のままか

95 思ひ出させて遣る瀬なや、夢になりともせめて面影

96 思ひ出すとは忘るるか、思ひ出さずや、忘れねば（*恋）

97 思ひ出す日なし、忘れてまどろむ夜半もなし（*恋）

98 思ひの煙が消えつ焦がれつ、あ笑止と立つ名や、立つお名やの（*恋）

99 思ひは増すと忘れはすまい、その夜の君の言の葉は

100 思ひよらずの腹立て顔や、恨みは数々そなたよりこそあるものを

101 思ひよらずの会釈の振りや、恨みの言もはたと忘れた

102 思ふ辺りの風の伝てまで、袖にゆかしや、袖にゆかしや

103 思ふ辺りの鐘聞きて、袖に月見る露涙

104 思ふこととなる身かの、ならぬものを、身に替へて思ふまじものを

105 思ふとて色見すな、誰も振りより頭はるる

106 思ふとてその色人に知らすなよ、思はぬ振りで忘るなよ

107 思ふほど言ふは言はず、言ふほどは書きも書かれず、何とせうぞの

108 思ふまいとは思へども、心任せにならぬものを、神や仏のあるならば、我が心を変はらせて給ふれ

109 思へど思はぬ振り見せて、隙間に見る目の愛しさや君

110 思へども賤の身なれば色には出さぬ、あただ心を尽くすよの

111 書き遣る文をただ徒らに、見もせで捨つる人は、なう恨めし

112 数々文は給ふれども、身がままにならぬよの、見る目もお愛しけれど

113 数々文を筑紫の人に、逢ひ初め候にはものは思はじ

114 数ならぬ身には思ひのなかれかし、人なみなみにもの思ふ

115 風の便りも懐かしけれど、もの言はねばこそあれ、恋しきものを

116 風の吹き候、なよ竹の靡き顔して折れ心もな（＊恋）

117 褐帷子に四つ割りの帯を後ろにしやんと結んだ、あらうつつな面影やの

118 葛城山の雲の上人を、雲の上人を

119 必ずと契るまじやれ、契れば障りのあるに

120 鐘さへ鳴ればも往なうとおしやる、ここは仏法東漸の源 初夜後夜の鐘はいつも鳴る

121 鐘は初夜、鳥は空音を鳴くものを、も往なうも往なうとは何の恨みぞ

122 鐘も聞こえて鳥もはや、月影の細く更け行く秋の夜の、人待つ身こそもの憂けれ、恨めしや

123 鐘も鳴る、夜も更け候、味気な我が身や、独り寝をする

124 交はす枕に涙の置くは、明日の別れを思はれて

125 帰る姿を見んと思へば、霧がの、朝霧が

126 かほどに薄き縁ならば、などしも初めに辛からで

127 神ぞ知りける我が仲を、千代万代と祈り候（＊恋）

128 唐崎の松かや我は独り寝て、波の夜々もの思へとは

129 諫鼓苔深うして露繁けれど、あまり見たさにまた来たよ

130 聞くもしゆんなり郭公、二人寝る夜はなほ

131 北野の梅も吉野の花も散る、君心あれ

132 後朝のはらほろはらほろとか、我を慕ふは涙よの、涙よの

133 昨日より今朝の嵐の激しさよ、恋風ならばそよと吹かな

134 君かや闇には訪ひも来で、月には頭はれて云、名の立つにの

135 君が代は千代に八千代にさざれ石の、巖となりて苔のむすまで

136 君様は明石の浦の塩屋の煙、心と振りと立つに潮の候

137 君様は西にたなびく叢雲よ、来たはよけれど振り心

138 君と初子の初春よりも、風も治まり雲静かに、国富み民ものどかなりけり

139 君と我、南東の相傘で、逢はで浮き名の立つ身よの

140 君の訪れもしやとて、来ぬ人のみを松の葉の、色も一入つれなきに

141 君の心が変はれかし、つれなき心の

142 君の心の叢雲に、涙の雨の降らぬ日もなし（*恋）

143 君の心は折々に変はる、花は昔の色に咲くもの

144 君の辛さも情故、馴れぬ昔は恨みなきもの

145 君の情の深き故か、思ひしほどは名も立たぬ

146 君は出づる日、我は雪、逢へば心がうち解くる

147 君は高間の峰の白雲、よそにのみ見てやみなん

148 君は月、思ひ明石の恨みねば、須磨の浦波、須磨の浦

149 君は初音の郭公、待つに夜な夜な離れ候よ（*夏）

150 君待ちて待ちかねて、定番鐘のその下での、じだじだじだ、じだじだを踏む

151 君も見ると眺むれば、上の空なる月も懐かし

152 君故ならば雪の野に寝よ、よしやこの身は消ゆるとも

153 君故にかかる浮き名の竜田山、紅葉葉よ、ただ色に出て

154 君故に我も浮き名を流すとも、底の水屑ともになりなむ（*恋）

155 君を忍ぶには逢坂の、関路苦しや、もはや鳥が鳴く

156 消ゆる憂き身と思へばの、人の辛きも偽りも、さのみ恨みと思はれぬ

157 切りたけれども、いや切られぬは、月隠す花の枝、恋の路

158 草の庵の夜の雨、聞くさへ憂きに独り寝て

159 葛の葉は何を恨むかの、恨むかの、思ふとてまた振り召すな、多分振りより頭はるる、恨めしや

160 雲の上人、及びなけれど、さりとは（*恋）

161 雲の上人を思ふはかなさ、恋の路なれば、さりとは

162 曇らば曇れ照るとても、君を思ひの晴るるでもなし

163 呉竹くれたけの靡なびく振りして靡なびかぬは、誰たれか契ちぎりを夜よ々に籠こめつらう

164 呉竹くれたけの折掛垣をれかけがきの片表かたおもて、幾度いくたひ言いふもこなたからこそ

165 紅くれなゐの下したは焦こがれて上うへ呆ぼけて、他人たにん振りすれば、振りすれば、なほいとほしい

166 今日けふ暮くらし、明日あすを頼たのまぬ徒あだな身みに、繰くり返かへしもの思おもふ

167 越こえ越こえて稀まれに今宵こよひぞ逢坂あふさかの、夕告鳥ゆふつけとりも心こころあれかし

168 心こころなしとはそれ候さうよ、冴さえた月夜つきよに黒小袖くろこそで

169 心こころのうちの乱みだれ髪がみ、取とり上あげて言いふにこそ、人ひとの知しらばや

170 心こころ深ふかきも要いらぬもの、身みは朝顔あさぎほの花はなの一ひと時とき

171 心任こころまかせの君きみはただ、見みるも嫌いやよの、氣きの毒どくぢや

172 後生ごしやうを願ねがひ、うき世よも召めされ、朝顔あさがはの花はなの露つゆより徒あだな身みを

173 五条ごでうわたりを車くるまが通とほる、誰たそと夕顔ゆふがはの花車はなぐるま（*夏）

174 言葉ことばは花はなの咲さくものを、涙なみだぞ思おもふ標しるべなる（*春）

175 来ぬ人ひとを松まつの葉はに降ふる白雪しらゆきの、消きえこそ返かへれ、消きえこそ返かへれ

176 来ぬも可かなり、夢ゆめの間あひだの露つゆの身み、逢あふとも宵よひの稻妻いなづま（*恋）

177 この春はるは花はなにまさりし君持きみもちて、青柳あそやぎの糸乱いとみだれ候さう

178 木幡山路こはたやまぢに行ゆき暮くれて、月つきを伏見ふしみの草枕くさまくら（*秋）

179 恋路こひぢほどの憂うきことは世よにあらじ、逢あはねば見みたし、逢あへば別わかれる

180 恋こひをさせたや鐘撞かねつく人ひとに、人ひとの思おもひを知しらせばや

181 恋こひをする人ひとの心こころのはかなさよ、夜よな夜よななことに涙なみだとくとくと

182 恋こひをせばさて年とし寄よらざる先さきに召めさりよ、誰たれか再ふたび花はな咲きかん、恋こひは若わかい時ときのものぢやの、若わかい時ときのものよ

183 咲きく時ときは花はなの数かずにはあらねども、散ちるには漏もれぬ山やま桜ざくらかな

184 咲きく花はなも千ち代よこの九へ重ぎく八くら重なん桜わ、何なんぞ我わが身みの一ひと花はな心こころ

185 咲きくをみ見てこそ人ひとは皆みな、心こころ惑まどはす花はなのもと

186 さざれ石いしに今いまも譬たとふる君きみが代よは、巖いはを待まちたんほどぞ久ひさしき

187 定めなき世よはなかなか、憂うれきことや頼たよりなるらん

188 さても恋こひには死しなれぬか、生いきて甲か斐ひなき我わが命いのち

189 さてもそなたは霜しもか霰あられか初はつ雪ゆきか、縮しめて寝ぬる夜よは、なう消きえ消きえとなる

190 さてもそなたは霜の白菊、移りやすやなう、移りやすやなう

191 さないこそ命よ、情のおりやらうには生きられうかの（*恋）

192 さのみ人をも恨むまじ、我が心さへ従はぬ世に

193 志賀の浦とて潮はないが、顔の笑窪は十五夜の月

194 志賀の浦波夜懸けて、君を思へば逢ふ身よの

195 時雨候もの神無月、晴れては曇り振り心

196 時雨も雪も折々に降る、君故涙はいつもこぼるる

197 死なばや、いやまた死なじ、逢ふこともあり（*恋）

198 死ぬるほど惚れたが申しは出さぬ、命限りにいつまでも

199 忍ぶ玉章、月に読まんと空見れば、あ月もなの村雨や（＊秋）

200 忍ぶ仲よそへ漏らすな変はるとも、添はぬはうき世、名こそ惜しけれ

201 忍ぶ身なれば色には出でぬ、あただ心を尽くすよの

202 忍ぶ身にさへ悋気を召さる、忍ばぬ身ならばさて何とあらうぞの

203 しばし待て硯の上の薄氷、うち解けてこそ文も書かるれ

204 十七八は砂山の躑躅、寝入らうとすれば揺り揺り起こさるる

205 潮に迷うた、磯の通ひ路（＊恋）

206 霜か霰か初雪か、締めて寝る夜半の消え消えとなる

207 霜枯れの葛の下葉のきりぎりす、恨みては鳴き、恨みてぞ鳴く（＊秋）

208 尺八しゃくはちの一節ひとよぎり切こそ音ねもよけれ、君きみと一夜ひとよは寝ねも足たらぬ

209 縹しゆす子の袖そで細ほそに伊勢いせ勢せ編笠あみがさが、召めす気きぢやとの、お目め好すきぢやとの

210 初夜しよやかと思おもうた、あ憂うや、別わかれの六むつぢやもの

211 心気しんきの花はなは夜よ々に咲さく、情なさけの花はなの一夜ひとよ咲かぬか

212 真如しんによの波なみに身みは染そみはせねど、浮うき名なの立たたぬ日ひはなかりけり

213 濯すすぐまじやれこの小袖こそで、馴なれし匂におひの散ちるが惜をしきに

214 住すまば都みやこよ、捨すてば都みやこ、味気あぢきな的身みや（＊雑）

215 住すみ処かとて柴しばの庵いはりも懐なつかしや、都みやこなれども旅たびは憂ういもの

216 住吉すみよしの松まつの嵐あらしも霞かすむなり、遠里とほざと小野をのの春はるの曙あけぼの

217 末の松山小波は越すとも、御身と我とは千代を経るまで

218 末も通らぬ薄情、なかなか今さらもの思ひ

219 笑止や、うき世や、恨めしや、思ふ人には添ひもせで

220 狭い小路の笹の葉の露、風は吹かねど散りて懸かる、咎なき笹を、咎なき笹を伐るばかり

221 せめて言葉をうらやかになう、今帰る我に何の恨みぞ

222 詮ない恋に名は立ちて、憂いや辛や、何しに思ひ初めつらう

223 詮ない恋を志賀の浦波、夜人に寄る（＊恋）

224 善悪ふたつの鐘の声、初夜は馴れ馴れ、後夜は嫌で候

225 千夜契ると初夜は好し、聞くももの憂き暁の六つ

226 添^そうたより添^そはぬ契^{ちぎ}りはなほ深^{ふか}い、添^そはで添^そはでと思^{おも}ふほどに

227 添^そうて退^のく身^みはある慣^ならひ、添^そはで思^{おも}ふはなほ深^{ふか}い

228 底^{そこ}はうち解^とけて上^うの空^{そら}する振^ふりは、なほいとほしい

229 袖^{そで}の上^{うへ}に誰^{たれ}故^{ゆゑ}月^{つき}は宿^{とど}るぞと、よそになしても人^{ひと}の間^とへかし

230 袖^{そで}を引^ひくとして腹^{はら}なな立^たてそ 云^云、深^み山^{やま}石^{いし}坂^{さか}の坂^{さか}の茨^{いばら}の人^{ひと}を引^ひかばや

231 そと締^しめて給^{たま}ふれの、手^て跡^{あと}の付^ついて名^なの立^たつに

232 そなた忍^{しの}ぶと名^なは立^たちて、枕^{まくら}並^{なら}ぶ間^まもなやの

233 そなたの空^{そら}も恋^{こひ}しきに、立^たちな隔^{へだ}てそ、春^{はる}霞^{がすみ}

234 そなたも我^{われ}も忍^{しの}ぶ身^みでおいて、夜^よな夜^よなごに逢^あはうとはいかに

235 そなた故にこそ浮き名の立つに、なう驚けよの、先づはお寝るよの

236 そなた故にぞ身を焦がす、さらば煙と消えもせて

237 そよめく音に幾度出でて、君待つ時の萩の風

238 竹の丸橋いざ渡らう、瀬でも淵でも落ちばもろとも

239 竹ほど直なるものはなけれども、雪々積もれば末は靡くに

240 ただ遊べ、帰らぬ道は誰も同じ、柳は緑、花は紅

241 ただ置いて霜に打たせよ、咎はの夜更けて来たが憎いほどに

242 叩く妻戸は開けもせて、先づは明けたよ、ほのぼのと明けた

243 ただそなたは伏籠の煙、名残惜しさに立ちかぬる（＊恋）

244 立たば立て我が名、君故ならば惜しからぬ命

245 立つ名は繁し、逢ふは稀なり（＊恋）

246 譬へ言には便なけれども、身の影法師に君をなして添はいで

247 譬へば人の偽りも、なきにはまさる思ひ出すけに

248 種取りて植ゑし植ゑなば武蔵野も、狭くやあらん、我が思ひ草

249 手枕の隙間の風ももの憂きに、露霜に濡れて門に立つ、君故

250 誰か作りし恋の路、いかなる人も踏み迷ふ

251 誰か再び花咲かん、あただ夢の間の露の身に

252 誰に馴る誰に馴ると我に聞かすな、聞けば腹竜田山、顔に紅葉の散るに

253 誰もうき世は仮の宿、さのみ人目も包むまじよや、君

254 誰も聞けとよ松風を、人待つ暮れのいかにもの憂き

255 近くて辛きは恨めしけれど、憂きはものかの、恋しきよりは

256 契らぬとても名の立つに、独りお寝るか、独りお寝るか

257 千度百度おしやるともなるまじものを、うつつなのそなたや、我に主ある思ひ切れとよ

258 千歳澄む池の水際の八重桜、影さへ底に重ねてぞ見る

259 千歳旧るとも散らざる花と、心の変はらぬ人もがな

260 千夜も一夜も、帰る朝は憂いものを（＊恋）

261 千夜百夜は及びなや君、猪名の小笹のせめて一夜を

262 千夜百夜はかなの契り、せめて稻妻の間

263 沈の煙とそなたとは、夜々に留めても留め飽かぬ、留め飽かぬ、夜々に留めても留め飽かぬ

264 月隠す山また雪に埋もれて、何の上にも報いあるもの

265 月こそよけれ折節は、月は託言になるものを

266 月に曇りはなけれども、君に逢はで闇々と戻り候

267 月の夜にさへ来ぬ人を、なかなか待たじ、雨の夜に

268 月はえせ物、忍ぶ夜はなほ冴ゆる（＊秋）

269 月は濁りの水にも宿る、数ならぬ身に情あれ、君

270 月待つ月は冴えもせで、君待つ月は冴ゆるよの

271 月もろともに立ち出でて、月は山の端に入る、我は妻戸に

272 月夜の憂さよ、月夜の憂さよ、闇なるべくは曇らじを、曇らじを

273 月夜の鳥は呆れて鳴く、我も鳥か、そなたに惚れて泣く

274 月よ花よと遊ぶ身でもな、あただうき世を捨てかぬる

275 月よ花よと暮らせただ、ほどはないものうき世は

276 月を踏んでは世の常候よ、風雨の来こそ尽期なれ（＊秋）

277 包めども色には出づるぞ、これ見よ袖の涙を

278 包めども色は涙に頭はれて、袖にとくにとくにとくにと

279 包めども隠れなき身は夏虫の、身より余れる思ひかな

280 露と消ゆとも人に知らせじ、数ならぬ我故君の名や立たん

281 つゆ初様に逢はせて給ふれ、思ひ焦がれて消えやうかの命

282 露初霜は朝の間に消ゆる、思ひ叶はずは消えやうかの命

283 辛き言葉の種もがな、独り寝る夜の慰みに（*恋）

284 辛き別れを願みず、さていつよの（*恋）

285 つれなかれかしなかなかに、つれなかれかし（*恋、但し一伝本では小歌）

286 つれなきものよ富士の雪、夏来ても解けぬ君

287 つれなの振りや、すげなの顔や、あのやうな人がはたと落つる

288 定家葛に這ひ纏はれて、離れ難なの、今朝の別れは

289 手に手を締めてほとほと叩く、我はそなたの小鼓か

290 杜子美山谷李太白にも、酒を飲むなと詩の候か（＊雑）

291 年寄れば同じことこそ申さるれ、君は千代ませ、君は千代ませ

292 とても消ゆべき露の玉の緒、逢はば惜しからじ（＊秋）

293 とても消ゆべき露の身を、夢の間なりと、夢の間なりとも

294 とても辛くは春の薄雪、思ひ消えよの、積もらぬ先に（＊春）

295 とても名の立たば宵からおりやれ、よそへ忍びの帰るさは嫌

296 とにかくに人の命ははかなきに、契りを急げ、夢の間なるに

297 とにかくにも笑止なる人や、兎手柏の二面（＊恋）

298 訪はれぬほどは曇らば曇れ、遂に映さん袖の月影

299 飛ぶ蜚何を思ひて身を焦がす、我は恋路に身をやつす

300 訪へば恨むる、訪はねばもとより、さて何とよの（*恋）

301 訪へば訪ふとて振らるる 云、訪はねばつらるる

302 鳥と鐘とは思ひの種よ、とは思へども人により候

303 泣いても笑うても行くものを、月よ花よと遊べただ

304 中空になすなよ富士の夕煙、立つ名に替へて思へばの

305 なかなか消えて露の身、契り朝顔（*秋）

306 なかなかに捨てらるる身こそ頼みなれ、飽かぬ別れのさてさてものかや

307 なかなかに馴れぬ昔のままならば、今さらものを思はざらまし

308 長の枕に広の褥や、明けぬ夜や、さて捨てらるる憂き身は

309 泣くは我、涙の主はそなたよ（*恋）

310 名残数々惜しけれど、我が身ながらも我が身ならねば

311 名残惜しきも理や、逢ふも別れも初ぢやもの

312 情あれただ朝顔の、花の上なる露の身なれば

313 情懸けうもの悔しやな、なんぼう恋には身が細る

314 情は積もれ、初雪な降りそよなう、いとど心の消え消えと

315 情も嫌で候、辛きさへなほ恋しきに（*恋）

316 夏衣なつころも我われは偏ひとへに思おもへども、人ひとの心こころに裏うらやあるらん

317 夏なつの夜よの長ながさと秋あきの夜よの短みじかさ、人ひとによるよの、人ひとによるよの

318 夏なつの夜よを寝ねぬに明あくると言いふ人ひとは、ものと思おもはぬか、ものと思おもはぬかの

319 何なにとおしやるも籠かごで候まち、心言こころことば葉はが花はなになる、散ちる漏もるよの

320 何なにとかなして忘わすれうやれ、思おもひ遣やられて遣やる瀬せなや

321 何なにともなればなるるものを、とやしらかくやしら、ああただただ

322 何なにを歎なげくぞ葛くずの葉はの、恨うらみは人ひとによるもの

323 靡なみかずと靡なみかずと、せめて見る目めをうらうらと

324 靡なみきやすきは嫌いやで候まち、人ひとの思おもはばまた糸柳いとやなぎ

325 なほざりのほどこそ恥づかしの、漏りなば漏りよ我が涙（*恋）

326 な乱れそよの糸薄、いとど心の乱るるに

327 名好し名好しは憂き人、夏の撫子名好し、昼は色好や、夜は萎るる、なう名好し

328 鳴る瀬も候、音無川とて鳴らぬ瀬も候（*恋）

329 鳴るな入り相、撞く鐘、今咲き出づるおはつせの花

330 馴れしその夜は初秋のその面影、いつに忘れうぞ、あ来世まで

331 馴れ初めて別るることのなかりせば、何に名残の惜しからん（*恋）

332 鳴れや入り相、鳴くな鶏（*恋）

333 西が曇れば雨になる、来たで止み候、我が恋は

334 庭にはの夏草なつくさ茂しげらば茂みちれ、道みちあればとて訪とふ人ひともなし（*夏）

335 濡ぬれてこそ帰かへるらう、君きみは朝露あさつゆに、我われが袂たもとも乾かわかぬものを

336 濡ぬれぬ先さきこそ露つゆをも厭いとへ、濡ぬれての後のちにはともかくも（*秋）

337 願ねがひのままに待まちえてや、初はつの花はな見る、花はなのお顔かほ見る

338 寝ねても覚さめても焦こがれてゐる我われに、何なんぞそなたのよそ心こころや

339 寝ねても覚さめても忘わすれぬ君きみを、焦こがれ死しなぬは異いなものぢや

340 寝ね乱みだれ髪がみの手枕たまくらに、春雨さるさめに乱みだる糸柳いとやなぎ

341 寝ね乱みだれ髪がみの涙なみだの色いろは、春雨はるさめに乱みだる糸桜いとざくら

342 寝ねらるればこそ夢ゆめは見みれ、羨うらやましやな、人ひとは思おもひのなき故ゆゑか

343 寝られぬままに月見れば、袖は露やら涙やら

344 のかい放さい帯が解くる、今に限らうか逢はうものを

345 野分山嵐も身に染まぬ、宵々ごとに君を待つには

346 花が見たくは吉野へおりやれの、吉野の花は今が盛りぢや

347 花に嵐の吹かば吹け、君の心のよそへ散らずは

348 花は散りてもまたも咲く、君と我とは一年よ

349 花は散りてもまたも咲く、人は若きに返らずや

350 花は吉野、月は更科、人は恥づかし、立ち所（*雑）

351 花は吉野、紅葉は竜田、あの初様に、あのお初様に増す花はあらじ

352 花はなよ月つきよと暮くらせただ、ほどはないものうき世よは

353 花はなを嵐あらしの誘さそはぬ先さきに、いざおりやれ花はなをみ吉野よしのへ

354 花はなを嵐あらしの散ちらすやうな雪ゆきに、袖そでうち払はらひ誰たれかおりやらうぞの

355 花はなを散ちらする風かぜよりも、なほもの憂うれきは初はつに逢あふ夜よの飽あかぬ別わかれ路ぢ

356 花はなをみ吉野よしのに通かよひなば、静しづかに語かたれ憂うれき昔むかし

357 春はるの名残なごりは藤躑躅ふぢつつじ、人ひとの情なさけは一言ひとこと（＊春）

358 春はるは花はな、夏郭公なつほととぎす、秋あきは月つき、冬薄雪ふゆすすきに人ひとは心こころ（＊雑）

359 東切ひがしきり窓まど、月つきうち入いりて、添そひ寝ねの枕まくら恥はづかしや

360 引ひかば靡なびけとよ糸薄いとすすき、枯かれ野のになれば要いらぬ憂うれき身みを

361 日暮れ日暮れに門に立つ、見て候君をよそながら

362 人柄はたをやかにしてなよ竹の、折るに折られぬ、心強やの（*恋）

363 人と契らば薄く契りて末遂げよ、紅葉葉を見よ、濃きは散るもの

364 人と契らば濃く契れ、薄き紅葉も散れば散るもの

365 人には馴れて馴れましものを、今この思ひ何に譬へん

366 人の嫌がる我が身を、撓ひ纏れて何せうぞの

367 人の心は霜の白菊、移りやすやの、移りやすやの

368 人の辛さも恨むまじ、思ひ初めしが身の咎よの（*恋）

369 人の辛さもなかなか、恨み候まじ我が心（*恋）

370 人の情のありし時、など独り寝を慣らはざるらん（*恋）

371 人の濡れ衣北時雨、曇りなければ晴るよの（*冬）

372 人は恋しし名は漏れじとす、これかや恋の重荷なるらん（*恋）

373 人は知るまじ我が仲を、頼むぞ側の扇も帯も

374 人はよいものとにかくに、破れ車よ輪が悪い

375 人目繁さにも言はぬ、心のうちはの

376 人目忍ぶの垣もがな、結び立てて頼りなやな、恨み葛の葉（*秋）

377 一夜なりとも逢坂の、関越えて聞く鳥の音もがな（*恋）

378 一夜二夜と言はばこそ、せめて朝顔の花の露の間なりと

379 一夜二夜と馴れ初めて、さて諸白髪、諸白髪

380 独りお寝らば参らうずものお伽に、雨降り真の闇なりと

381 独りお寝るか、独りお寝るか、いや二人寝るもの影ともに

382 独り寝る夜の寂しきに、二人寝る夜の山郭公（*夏、但し一伝本では秋）

383 独り寝覚めの長き夜に、誰を松虫鳴き明かす

384 独り寝しもの、憂やな、二人寝寝初めて、憂やな独り寝（*恋）

385 独り寝て二人寝る夜の有り様を、語るな人に、なう枕

386 独り寝に鳴き候よ、千鳥も（*恋）

387 独り寝は嫌よ、暁の別れありとも

388 独り寝も好やの、暁の別れ思へばの

389 独りも寝けるもの、寝られけるもの、慣らはしよの、身は慣らはしものかの

390 独りも行き候、二人も行く、残り留まれと思ふ人も行き候

391 比翼連理の語らひも、心変はれば水に降る雪

392 昼は人目の繁ければ、夜はうき世や思はるる

393 更け行く鐘も、別れの鳥も、独り寝る夜は障らぬものを（*恋）

394 吹けよ松風、吹かねば山居の寂しきに（*夏）

395 富士の煙は空に立つ、味気なや、我は下燃えに

396 富士の山には煙立つ、世にはなき名の立ち候

397 富士ふじや浅間あさまも何なにならん、君思きみおもひ寝ねの胸むねの煙けぶりは

398 不審ふしんならば鉦かね打うたう、いや鉦かねも無益むやく、ただ振ふりにて知しるものを

399 二人ふたり聞きくとも憂うれかるべし、竹たけの編戸あみどに笹ささ葺ぶきの雨あめ（*恋）

400 二人ふたり聞きくとも憂うれかるべし、月斜つきしや窓まうに入いる暁寺げうじの鐘かね（*秋）

401 二人ふたり聞きくとも憂うれかるべし、独ひとり板屋いたやの暁あけの雨あめ（*恋）

402 文ふみに真砂まごを巻まき添そへて、よそへ約束やくそくすなすなと

403 文ふみの通かひもなきものを、何なにの便まりに夢ゆめに見みゆるぞ

404 文ふみは遣やりたし、せむ方かたな、通かふ心こころのものを言いへがな

405 文ふみは遣やりたし、伝つてはなし、思おもふ心こころを夢ゆめに見みよ君きみ

406 振りよき君の情のないは、きみ なさけ 冴えゆく月に懸かる叢雲つぎ か わらくも

407 不慮にそなたと馴れ初めて、ふりよ 今はなかなかもの思ひ、もの思ひ、今はなかなかもの思ひおも

408 豊後や薩摩の殿たちに殿たちに、ぶんご さつま 一夜二夜とよ馴れ初めて、明日は舟出る、何とせうぞの、恨めしやあす ふねづ

409 ほどが経たらば薄からで、へ なほも思ひの真澄鏡おも (*恋)まさかがみ

410 ほのぼのと春こそ空に来にけらし、はる 天の香具山霞たなびくあま かぐやまかすみ

411 枕合はせに寝たれども、まくらあ 思ひ合はねば二人独り寝おもあ ふたりひと

412 枕こそ知れ我が恋は、まくら 涙懸からぬ夜半もなし (*恋)なみだか よは

413 枕の海は波立つばかり、まくら うみ さらば見る目のありもせでなみた

414 また見て候憂き人を、み そらう うたたねの夢に (*恋)ひと ゆめ

415 またも逢はうずは不慮で候、優曇華の花今ばかり

416 待ちて来ぬ夜の降る雨は、涙なりとは月ぞ知らする

417 松に降る時雨、つれなの色や

418 松の垣穂の八重葎、かかる所にも住まるるか（＊雑）

419 待つは慰むものなるに、鳥はものかはと誰か言ひけん（＊恋）

420 待つ人は来もせで、月は出でたよの（＊秋）

421 待つほどは過ぎつ、さていつよの（＊恋）

422 待つも別れも思ひはひとつ、今朝の面影の身を離れぬ

423 待てとはそなたの空情心よ、いや待つまじや、待つまじ

424 まどろまば夢にも見るべきに、うつつなや、恋には目も合はぬものか

425 まどろみてこそ夢にも見め、返して何せうぞ小夜衣

426 稀になりとも主おりやれ、思ひの増すに文の数々

427 見えそな見えそ、な悶えそ、見れば互ひに袖の濡るるに

428 三笠の山の白雪か、我は君の辛さにならで消え消え

429 身がな身がな、ひとつ都に田舎にもまた（＊恋）

430 三草山より出づる柴人、荷負ひ来ぬればこれも薫物（＊雑）

431 見ずは恋にはならじものを、あたた恨めしの目の厄や

432 見せばや君に知らせばや、心のうちと袖の色を

433 見たこともあり聞いたこともある、我にも情あるならば言はじ

434 乱れ初めては人目も入らぬ、馴れぬ昔に思案せうずもの

435 水に落葉の大井川、いかに嵐の山に山に（*冬）

436 身な焦がれそ、縁さへあらば末はさりとも（*恋）

437 身は宇治の柴舟、柴舟ならば思ひ懲り積み、柴舟（*恋）

438 身は蛤、文見る度に濡るる袖かな（*恋）

439 身は松の葉よ、色に出づまじ、散らじ、変はらじ（*恋）

440 身は山雀、放せよ我を、待つのみばかりで来る身でもなし（*秋）

441 身は遣りたし、せむ方な、通ふ心のものを言へがな（*恋）

442 身は破れ笠、来もせですげなの君や、懸けて置く

443 見見ゆると情あれかし夢にさへ、つれなの振りや、なう君は

444 見目がよければ心も深し、花に匂ひのあるも理

445 都恋しや賀茂川の、水は再び澄むものを（*雑）

446 都恋しや堀川の、水は再び澄むものを（*雑）

447 見る目ばかりに波立ちて、鳴門舟かや、阿波で漕がるる

448 見る目ばかりの契りにて、須磨の浦波、須磨の浦（*夏）

449 海松布海松布を取り取り取ると、様が寝るる

450 見るも苦しみ、見ねば恋しし、味気な的身や（*恋）

451 見れば思ひの真澄鏡、曇らば曇れ、嫌よ面影

452 昔の人は恋をばせぬか、など暁の鐘は定めし

453 武蔵野の一本薄、独り寝も憂や、つれもなや

454 武蔵野は名に限りあり、君を思ひの果てもなし（*恋）

455 武蔵野原の一本薄、いつさて穂に出で乱れ乱れ逢はうぞの

456 胸の間に蛍あるらん、焦がるるるるる、いつも夜な夜な懂るる

457 梅は北野、花は吉野、松は住吉、人を待つには

458 梅は匂ひ、花は紅、柳は緑、人は心（*春）

459 梅は匂ひよ木立は要らぬ、人は心よ姿は要らぬ

460 めでたやな今日立ち初むる鶴の子は、千代の齡を重ぬべきかな

461 めでたや松の下、千代も幾千代千代千代と（*春）

462 目には見て手には取られぬ月のうちの、桂のごとき君にぞありける

463 もの思へば人の言ふとも聞き入れず、あただ心のうかうかと

464 もののしゆんなは春の雨、なほもしゆんなは旅の独り寝

465 ものもおしやらぬ、知らずや何の恨みぞ（*恋）

466 紅葉葉の色に出づるはうき世の山の慣らひ、さてもひとしけなの浅間の岳の煙や

467 八島の磯の荒波かそなたは、寄せつうち退けもの思はする

468 柳の枝の郭公、誰が引くやらたよたと、たよたと

469 やへた 八重立つ雲の上人に、馴れて悔しや捨てらるる

470 山の端にこそ月はあれ、恋の路には尽きもなや

471 山は憂いもの、都隠せば山は憂いもの（＊雑）

472 聞にさへならぬ、月にはとても、あら鈍なお人や

473 やもめ烏の羨むも哀れ、鴛鴦独り宿せず（＊恋）

474 遺る文をいかでかかくは散らすらん、立たば二人の浮き名なるもの

475 雪の上降る雨候よ、君は消え消え消えと、消え消えと

476 雪折れ竹をそのまま垣に、世は皆人の言ひなし

477 行くも嵐、戻るも嵐、あ笑止と花の散り候よ

478 行くもそろり、戻るもそろり、逢はう逢はうと杳の鳴き候よ

479 夕べ夕べに浮かれ候、君は初音の郭公

480 夢かうつつか幻か、思ふお人にはたと逢うた

481 夢にさへ見ぬ面影は、なんぼうつれなき君様ぞ

482 夢になりとも情はよいが、人の辛さを聞くも嫌

483 夢に見えつ、うつつに馴れつ、あ笑止と去らぬ面影や

484 夢にも見ゆらんとまどろめば、笑止と雨の云、枕打つ音

485 夢のうき世の露の命のわざくれ、なり次第よの、身はなり次第よの

486 夢は隔てず海山を、越えても見ゆる夜な夜なに

487 夢^{ゆめ}二人^{ふたり}覚^さめて見た^みればただ独^{ひと}り、夢^{ゆめ}さへ我^{われ}に肝^{きも}を煎^いらす

488 夢^{ゆめ}も結^{むす}ばぬ短^{みじ}夜^よに、歎^{なげ}きな添^そへそ、山^{やま}郭^{ぼく}公^{こう}

489 よしさらば袖^{そで}に涙^{なみだ}の漏^もらば漏^もれ、君^{きみ}故^{ゆゑ}とさへも人^{ひと}の知^しらずは

490 よしや思^{おも}はじとは思^{おも}へども、心^{こころ}任^{まか}せにならぬよの

491 よしやそなたの風^{かぜ}ならば、花^{はな}に吹^ふくとも辛^{つら}からじ（*春）

492 よしやそなたの風^{かぜ}ならば、花^{はな}に吹^ふくとも、花^{はな}に吹^ふくとも

493 よしやただ君^{きみ}こそ我^{われ}に辛^{つら}くとも、浮^うき名^なは立^たてじ身^みの咎^{とが}にして

494 よしや辛^{つら}かなかなかに、人^{ひと}のよいほど身^みの仇^{あだ}よの（*恋）

495 よしや慰^{なぐさ}め我^わが心^{こころ}、同^{おな}じうき世^よにあるを頼^{たの}みに（*恋）

496 よしや我^{われ}にも情^{なさけ}あれ、賤^{しづ}が屋^やに月^{つき}は宿^{やど}り候^{きう}はぬか（*秋）

497 よそ契^{ちぎ}らぬ、契^{ちぎ}らぬさへに名^なの立^たつに（*恋）

498 よそ契^{ちぎ}りし、契^{ちぎ}らぬ人^{ひと}も名^なの立^たつに（*恋）

499 よその梢^{こずえ}の慣^ならひして、松^{まつ}に時雨^{しぐれ}のまた懸^かかる（*冬）

500 よその辛^{つら}さを見^みればこそ、君^{きみ}のお情^{なさけ}の思^{おも}ひ知^しらるれ

501 世^よの中^{なか}は霰^{あられ}よの、笹^{ささ}の葉^はの上^{うへ}のさらさらさつと降^ふるよの

502 宵^{よひ}に來^きて暁^{あけ}帰^{かへ}る七瀬^{ななせ}川^{がは}、契^{ちぎ}り深^{ふか}かれ、川^{かは}は浅^{あさ}かれ

503 夜更^{よふ}けておりやるを今^{いま}思^{おも}ひ合^あはせた、いとほしの君^{きみ}や、身^みがままにならぬ

504 夜々^{よるよる}おりやれ、見^み合^あはせて君^{きみ}はいとほしいや、身^みがままにならぬ

505 万代の初めの春の今日しより、仕へまつらん年に合ひつつ

506 情気心か枕な投げそ、投げそ枕に咎はよもあらじ

507 恋慕は奥の奥の間の卓よ、心に君を懸けぬ間もなや

508 若人前に文落とすな、木曾の梯あら危なやな

509 我が君の千代の松風のどかにて、枝も鳴らさず春は来にけり

510 我が恋は松に降る時雨、つれなの色や

511 我が待たぬ故にや、人の来ざるらん（*恋）

512 別るるとても歎くまじ、定めなき世ぞ頼みあるもの

513 別れはいつも憂けれども、死なすげに候、それ何故に、あまり名残が惜しいほどに

514 忘るるものをまた降り懸かる、帷子雪の消えもせて

515 我は野の花、主もなや、折らばとく折れ、散らぬ間に

516 我も昔は夢の間ほど契りしに、今さらとても知らぬ振り、嫌々

517 我を忍ばば思案して、高き窓から砂を撒け、雨が降るよと言うて出で逢ふ

518 会者定離、誰も逃れぬ世の中の、定めないとはい、なう偽り

519 幼顔せで恥ぢずと靡け、花も萎りて散る時は要らぬ

520 生まれと言ふはなかなか立ち返り、こと新しき御代の年かな

521 、竹の林に一夜なりとも

〔伝承歌〕

伝① 花香をば思ひも入れず梅の花、常ならぬ世に寄そへてぞ見る

伝
②

住^す之^の江^えの
岸^き辺^べに
漁^{あさ}る
葦^{あし}鶴^{たう}の、
歩^{あゆ}み
のどけき
春^{はる}の
日^ひの
影^{かげ}

